四、災　害

1. 水害　六月から九月の頃は雨量が多く、特に吉野川上流の水源地である土佐の豪雨は土佐水と呼ばれて直に吉野川の増水を来たして氾濫し夏期においては、しば〳〵その被害を見たのであるが、吉野川改修工事によつて築堤完成の後はやゝ減少した。しかし、豪雨が連日にわたるときは、増水のために北堤と南堤の間は一面の洋々たる大河となり、堤防の危険水域まで増水することもしば〳〵である。このような時には、堤防の至る所で吹き水がして、甚しい時にはその吹き水で附近の畑は冠水し、農作物に相当な被害を与える。昭和二十年九月の台風後の増水の時は、吹き水は特に激しく、濁つた水が湧き出る如く流れ出している箇所が相当あつた。特に著しい箇所は知恵島北。二条・高畑附近であつた。村当局は直に県に陳情し、現在はその復旧工事が進められている。

2. 水難の歴史をたどると次のようである。

(1) 旧く安永九年に大洪水があつた。

(2) 嘉永二年七月の大洪水は、デルタ式の知恵島を初め、高畑・小笠辺は常に被害の焦点に当つた。

(3) 安政四年七月二十九日から八月一日に、意外の大風雨があつて、前代未聞、五十年以来の大洪水になり、いまだに『八朔水』といゝ伝えられている。

(4) 寅の年の大水は、慶応二年（西暦一八六八年）旧八月五日から、三日三晩降り続いた雨が大洪水になり、知恵島の全部浸水したのは勿論、柿原・島田の庚申堂まで浸水したという。

(5) 明治二十五年七月二十二日に大洪水があつた。

(6) 明治三十二年九月八日（旧六月一日）の洪水で、土成村樫原谷が崩壊し、山津波を起して、人家が流失し、死者数名が高畑に流れつくという悲惨事があつた。なお高畑の住民は、[illegible]の炊出米の配給によつて飢をしのいだという。また千田須賀の東の堤防が切れた。

(7) 明治三十八年の大洪水で、西条須賀の堤防が決潰し、四ツ屋の被害が甚大であつた。

(8) 明治四十四年の大洪水は、知恵島小学校の校舎の窓枠に、小舟がついた位だから、西部を除き全村床上浸水の状態で、堤防の決潰を防止するため、非常警戒の半鐘が連打された。

(9) 大正元年の大洪水は、九月二十二日から二十四日まで、連続降り続いた。

(10) 昭和九年九月二十一日の室戸台風による大洪水があつた。

(11) 昭和二十年九月および十月の洪水は、改修工事の完成によつて被害は少かつた。

3. 水禍と恩恵

(1) 渡船転覆による阿中生および舟子の溺死事件、

(2) 潜水橋の水禍による聖憧寺住職巽僧都の横死、ならびに名西高女の生徒の禍死および夏季における水泳者の溺死ならびに漁夫の水禍等、枚挙に暇がない。洪水の被害は、甚大な損害を与えたが、またその反面において洪水の氾濫によつて自然肥料である肥土を被つて地味が肥沃になり、人工肥料を施さなくても藍草や桑樹が繁茂して収益をあげ被害をつぐなつた点もある。自然は無情の様であるが、一面恩恵をも与えるのである。

4. 堤防

(1) 堤防決潰による被害　大正元年九月、洪水のために知恵島村千田須賀北・中須賀・西知恵島および柿原村小笠等の堤防が数か所の腹崩または裾崩れがして、直にその筋に対し復旧の手続をしたが、年内修繕の運びに至らなかつた九月二十三日の洪水に際し、水に沈み床上に浸水したものが少なくなかつた。そのため炊事に差しつかえたので、手束平三郎から、二条前および高畑の全部に、救助米を出した。

(2) 堤防の修繕状況

年度				年度			
明治十九年	堤防ができた。	土台石	〃二十年度	一部決潰した。			
〃二十三年	西剣先から東中須賀まで六十間、堤防上に置服付をした。						
〃二十四年	字剣先	一五六六間	沈床工	〃二十五年	字中須賀	二〇六間	岸留根杭出
〃二十六年	字大性裏	一三〇間	馳込留出杭蛇籠	〃二十七年	字四ツ屋	一五間	岸留杭立籠
〃二十八年	字四ツ屋	五五〇間	岸留根杭立籠	明治二十九年	字篠原	一三五〇間	道路修理
〃三十年	字西剣先	七二間	提防服付石巻	〃三十一年	字大性裏	四二間	打切杭蛇籠
〃三十二年	字大性裏	一二〇間	岸留出杭	〃三十三年	字剣先から四ツ屋	一二八〇間	堤上置服付
〃三十四年	字四ツ屋	五五〇間	堤服付および立籠	〃三十五年	字千田須賀	七〇間	堤服崩臨時防
〃三十六年	字小島	一一〇間	堤内服山崩臨時防	〃四十五年	土盛をして高く上げた。		

(3) 本村の堤防工事　吉野川の氾濫防止の企の最初は、明治七年和蘭人技師デレーケ氏の調査研究であつた。越えて明治十九年、九十六万円の経費をもつて十一か年の継続事業として着手したが、一か年で中止した。その後住民の賦

課割で、明治三十二年に築堤した。さらに明治四十年から大正十五年まで、二十か年の継続事業として、内務省土木局の直営で、経費一千二百万円、延人員三百八十八万人を要して、吉野川改修工事が完成した。それによつて毎年洪水のために起る人畜・耕作物の被害を免れるようになつた。当時の事は、堤防は馬踏四間・両法三割・高さは高水位以上九尺、裏側には巾六尺乃至九尺の小段を付けた。これを現在は道路としている。源太渡附近で使用した工事機具は、陸上には一日二百立坪掘のエキスカベーター四台、独逸製機関車五台、三十封度レール十八哩で、機械的掘鑿方法によつて築堤した。

5. 台風による被害　毎年夏季の半ばから初秋にかけて襲来する暴風雨のため、その強烈な風速に依つて農作物の被害だけでなく、家屋の倒壊・人畜の死傷等の害を蒙ることがある。中でも最近における記録としては、昭和九年の風水害が最も激甚を極め、本村においても家屋の倒壊等に依つて負傷者を出す等の惨状を呈した。昭和二十五年のジェーン台風もまた風速三十米を超え、その被害は甚大であつた。なお本県における暴風雨の風速および雨量を、徳島測候所の記録によつて左に表記する。

○徳島県附近を通過した台風

台風来襲年月日	全速（米）	雨量	記事
明治二四、八、一六	一五、七	一二四、一	紀伊水道北上
〃 二五、七、二二	二三、三	一二六、八	上佐湾上陸北東進
〃 二五、九、二二	七	一二三、一	南海岸北東進
〃 二九、九、一一	一九、七	二〇三、三	
〃 三二、九、八	一三、八	九五、三	
〃 三七、八、三一	九、二	一七一、〇	
〃 三七、九、二	八、〇	一四七、五	
〃 四〇、六、二七	四、五	三八、三	
〃 四一、六、二六	五、五	一二、〇	
〃 四三、九、八	六、七	一〇五、七	県北東進
大正 一、八、二四	一四、七	一四一、六	土佐湾上陸北東進
〃 一、九、二二	一四、六	四三〇、七	室戸岬上陸北東進
〃 一、一〇、二	八、〇	四六三、四	土佐湾上陸北上
〃 四、八、五	一〇、六	一五四、六	紀井水道北上
〃 六、八、三	一六、三	一一九、二	室戸岬上陸北上
〃 六、一〇、一〇	二四、七	一九一、〇	土佐交上陸
〃 七、八、八	一五、四	一三六、六	南海岸北東進
〃 七、九、一四	二二、一	一六四、	
〃 一〇、八、二六	一五、九	四八、三	室戸岬上陸
〃 一二、八、三一	一四、八	八六、一	土佐湾上陸
〃 一三、九、二九	一一、四	一一九、四	同
〃 一三、一〇、八	一一、八	五五、九	南海岸東進
〃 一四、八、一一	八、六	五三、七	紀伊道北上
昭和 二、九、一三	五、二	一二、五	南海岸東進
〃 三、七、五	三、三	三、三	紀伊水道消滅
〃 四、六、五	一三、五	三一、四	県北東進
〃 六、一〇、一三	一〇、九	一七六、六	室戸岬附近東進
〃 八、九、二〇	九、六	四三、九	同
〃 九、九、二一	三六、七	五〇、五	室戸岬上陸北東進
〃 一〇、七、一二	七、六	—	県北東進
〃 一二、九、一一	三二、二	一〇九、七	土佐湾上陸

一九六

〃	一三、九、五	二四、七	九一、〇	南海岸上陸
〃	一六、八、一五	三七、八	七一、四	土佐湾上陸
〃	一七、八、三一	一三、三	四九、七	同
〃	一七、九、二一	一六、七	二五五、九	同
〃	一九、八、七	一六、八	二五、九	紀伊水道北上
〃	二〇、八、二五	二二、八	九五、六	土佐湾上陸
〃	二〇、九、一七	二九、三	一三四、二	九州上陸
〃	二〇、一〇、一〇	一六、七	四七九、一八	同
〃	二一、七、三〇	二五、四	一五五、七	豊後水道北上
〃	二三、一一、一九	一六、二	一〇、四九	土佐沖を東に通過（アグネス台風）
〃	二四、六、二一	二二、六	一一五、七	九州上陸（デラ台風）
〃	二四、八、一八	一四、〇	三〇九、二	九州上陸（ヂュディス台風）
〃	二五、九、三	二九、三	二四一、五	徳島県東部を北東進（ジェーン台風）
〃	二五、九、一四	二四、七	九八、九	九州を東進（キジア台風）